



2007年10月10日発行

これらの技術は業務効率を高める上での有効な手段だろう。ただ、使い方次第ではゾッとする情景も浮かび上がる。あちこちからカメラがのぞき込み、上からはドローンに見張られる。新たなデストピアが、企業内に生まれる可能性もある。

監視に慣れると人の行動はおのずと変わる。男女6人を1軒の家に集め、カメラを通して生活する姿を流す人気番組「テラスハウス」の松本彩夏プロデューサーは、「カメラに映る自分を演じるようになり、良くも悪くも見られていることを利用し始める」と話す。スマホの影響で若者はカメラ慣れしている。監視を逆手に取り、評価される行動を取り始める社員が登場するかもしれない。

皮膚振動から精神状態を把握

ただし、最新の監視技術は人間の想像力を超越し始めた。カメラが撮影するのは、顔や指紋といった目に見える対象だけではない。人間が思い通りにできない深層心理すらも感知できる。



カメラの前で1分間静止してください——。山口県周南市にある医療施設「海風診療所」では今年から一部の患者にこんな依頼をするようになった。映像からストレスや緊張度、活力などを分析する装置「メンタルチェッカー」で患者の精神状態を把握するためだ。この装置は、不審者を検出するロシア発のシステム「ディフェンダー-X」の技術を応用している。ディフェンダー-Xは14年ソチ五輪で使われて話題を呼び、16年の伊勢志摩サミットでも活用された。皮膚振動の強度や振幅などを調べ、異常値を示した人をはじき出す。評価に使う基礎データは10万人以上の人体実験が基になっているという。

オフィス空間を飛行して社内を撮影して回るドローン(上)。カメラの映像を解析する「メンタルチェッカー」(左)を使うと皮膚の振動などから精神状態が分かる。写真は利用イメージ

もちろん、海風診療所ではきわめて平和的な用途で活用している。聞き取りがメインのカウンセリングだけでなく客観性に欠ける面がある。「メンタルチェッカー」を使えば、患者が気づかなかった傾向も捉えることができる」と原田恭子看護師長は話す。

実は、メンタルチェッカーは国の重要施設などでも活用されている。少しのミスが致命的な事故につながる場所では、作業員の精神状態を日々、チェックする必要があるからだ。海風診療所は約30社の産業医も手掛けており、今後はメンタルヘルスの確認ツールとしても活用していく方針という。

試しやすい価格に落ち着いてきたことで、国内でも広がり始めた監視技術。だが、先端技術を武器に急成長する海外ベンチャーと異なり、日本企業は活用に二の足を踏んでいるのが実情だ。次ページからは、監視技術との向き合い方を探っていく。